地域おこし協力隊　第38回

魅力と資源あふれる積丹町での地域おこし

佐藤　佳奈（さとう　かな）

北海道小樽市出身。北海道情報専門学校卒業後、札幌でのIT企業勤務を経て、2023年11月より企業所属型の地域おこし協力隊として『一般社団法人 積丹やん集小道協議会』に所属。積丹町内に現存する唯一の鰊（にしん）番屋「鰊伝習館ヤマシメ番屋」の保全・継承活動や会員制クラブハウス「海森スタジオ」の管理、積丹町の歴史文化をテーマとしたイベント企画に携わる。

【協力隊に応募したきっかけ】

前職では、自治体基幹システムを運用しているIT企業に勤め、自治体職員が使用する行政システムのサポートエンジニアとして働いていました。

2023年５月に身内が危篤となり２カ月後に亡くなるまでの間で、「会社生活と私生活のバランス」について向き合わなければならない出来事が起きました。その際、今まで諦めていた「観光や地元である後志に根ざした仕事」に携わりたいと考えるようになりました。中学生の頃から自分でホームページを作り、ブログやSNSで自分の地元である小樽市の話題を発信したり、北海道情報サイトへ寄稿を行い、読者の方から感想をいただく中で手応えは感じていましたが、職業としての選択肢は当時の自分に無かったからです。また、すでに完成された観光地や組織で働くのではなく、これから地域や町と一緒に、まちづくりや観光に関する仕組みを作り上げて行ける組織での就業を考えた結果、積丹町地域おこし協力隊に辿（たど）り着き、エンジニアを退職することにしました。

【積丹町を選んだ理由】

今まで、エンジニア時代の外勤や出張、旅行を通して、離島を含む北海道内の約70市町村へ足を運びました。行く先々でその土地や住まわれている方の人柄を実際に見聞きしたりもしましたが、積丹町は雄大な自然、個性あふれる町内事業所の数々、観光客や見慣れない人へも気さくに話しかけたり挨拶をする町民の方々の姿が特に印象に残りました。

また、エンジニアを辞めるか否か考えていた時期に、ちょうど積丹町へ何度か遊びに行く機会がありました。その際、町内の事業所で働いている地域おこし協力隊員の姿や、SNSで現役隊員が発信する情報を実際に見聞きし、自分も積丹町の一員となって働きたいという気持ちが強くなりました。

さらには、積丹町は私の父親や祖父母の出身地でもあり、町にあふれた山々のうち一部は、松井町長が農林水産課の係長だった時代に、今は亡き私の祖父、祖父の同僚の方々とともに、いつ熊に食べられてもおかしくない環境の中で大変な苦労を経て造り上げたものでした。

だからこそ、まだまだ外部へ知られていない積丹町の歴史文化資源や町内施設、事業所の魅力を、自分の力で町内外へ発信していきたい、観光客へ伝えたいと思い、積丹町を選びました。

【積丹町はこんなところ】

積丹町は後志管内、北海道西海岸「積丹半島」の先端に位置し、雄大な自然あふれる町で、森と川と海がひとつの町で完結する珍しい地形をしています。産業の中心は漁業であり、夏はウニ丼を求め毎年たくさんの観光客が訪れます。また、積丹ブルーとよばれる神威（かむい）岬からの景色は絶景そのものです。人口は　約1,750人程で過疎化の心配がされてはいますが、近年は、地域おこし協力隊を含む方々の新規事業開拓が目立ち、クラフトジン蒸溜（じょうりゅう）所、アウトドアガイド会社、牧場や宿泊施設など、個性あふれる事業所関係者が町内で活躍しています。

【これまでの活動】

2024年11月１日で、協力隊着任２年目を迎えます。所属先である『一般社団法人 積丹やん集小道協議会』は、町内の美国地区で文化遺産「ヤマシメ番屋」という明治末期に建てられた約110年の歴史を持つ鰊番屋の保全、歴史文化の継承活動と、「海森スタジオ」という同じく明治末期に建てられた石蔵を活用した会員制クラブハウスの管理を行っております。地域おこし協力隊１年目の私の活動は、積丹町が観光客で賑(にぎ)わう夏が終わった後の秋からのスタートでした。

すでに活躍されている所属先の先輩隊員のもと、町内で開催されるイベントの企画準備や実施にチャレンジしたり、「冬の閑散期にできること」ということで、国の交付金や補助金を活用し、町内の料理人や漁業関係者の協力を得て未利用・未活用の海産物を利用したスープや加工品を作って展示商談会に参加し、商品開発や販路の確保のほか、町内で開催されたツアーのサポートをしたりと、１年だけでも凝縮した活動をしてきました。また、業務外では、町内行事やイベントに参加し、町内の方と交流するよう心がけました。

【積丹町での人の繋(つな)がりとやりがい】

現在、社会はスマホなどの電子機器やメッセージツールでのやりとりが主流ですが、町内では年代によってはそのようなツールを利用していない、もともと利用するのが苦手な方もいます。そのため、時間が許されるのなら、現地へ出向き、実際にその人へ会って直接会話をするようにしています。

鰊伝習館ヤマシメ番屋

会って話をすることで「佳奈さんのこの活動が良かったよ」「いつも頑張っているね」と何気ない行動ひとつでも励ましやお褒めの言葉をいただき、やりがいを感じることもあります。町内の方からの『言葉』は、次の業務への助言や原動力にも繋がっています。

また、積丹町へ移住後、町内在住の遠縁と話した際、私の高祖父が立派な鰊番屋の網元だったということを教えてもらいました。私自身、生まれてから現在まで全くその話は知らなかったので大変驚きました。単なるこじつけかもしれませんが、現在、自分が鰊漁で栄えた町での仕事に携わっていることは何かしらの縁なのかもしれないと思い、新たな視点で仕事を進めることができています。

【将来へ向けて】

まだ確定していませんが、積丹の歴史文化を伝え続けていける人材となるとともに、将来積丹町へ着任される地域おこし協力隊の相談窓口であったり、移住促進の担当窓口であったり、地域コーディネーターとして、町内の課題の解決に向けて、私自身が自ら解決へ動いたり、積丹町外の「ひと」と、町内事業所や町内の「ひと」を繋げて解決へ導く手助けができる積丹町民になりたいです。

また、長年培ってきたITスキルを、町民の方や町をはじめとした行政や町内事業所で活用できる場があるのなら、それを将来の事業のひとつとして活用し、IT推進員として積丹町の未来へ手助けができればと考えています。

海森スタジオ